

タカラ・テルの戦後の著作

このたびの名作選が、「戦後出版されたもので現在なお入手容易なもの」を、除外して編集されていますので、ここに、そういう本の案内を記して、読者の便に供します。

- 1 ハコネ用水 戦後における著者の代表作としてすでに余りに有名です。映画「箱根風雲録」として広汎な国民層に親しまれている他、さいきんでは、ソ同盟でも高く評価されて紹介されています。(理論社 二〇〇円 送料35円)
 - 2 新ニッポン語 最初文化評論社から「ニッポン語」という題で発行されたものに、改訂増補をほどこした決定版。たんにコトバの問題としてだけではなく民族問題の貴重な文献(理論社・一七〇円 送料25円)
 - 3 新文学入門 さいきん問題になっている国民文学論にとって、もっとも基礎的で指導的な文学案内として評価されています。(理論社・一四〇円 送料25円)
 - 4 ニッポンの女 最初「女」と題して改造社から出版されたものに、新論文を補充して成った、興味深い女性問題の基本文献(理論社・一〇〇円 送料15円)
 - 5 ぶたの歌 人民文学誌上で評判になり中国ソ同盟でも高く評価された短篇。これを、ローマ字運動や版画運動とむすびつけて、もっとも美しい漢本に作りあげた貴重な成果(理論社・一六〇円 送料25円)
- 以上はいずれも小社発行のものです。ごらんのように

タカラ・テル名作選 しおり



No. 1
理論社

発行のことば

すでに大分まえから、多くの読者によって、タカラ・テルの作品を、系統的に発行することがとめられていた。戦後の作品「ハコネ用水」が発表されたところから、その声は、とくにひろがった。「ハコネ用水」のように、広く深く大衆に感動をあたえる作品をよめば、誰しも、あのような精神の源流を探りたくなるのは、とうぜんである。

この源流を正確に探らうとすれば、タカラ氏の全作品を、この機会に復刻することが希わしいことだ。だが、そういうゆとりのある仕事を遂行するには、今はまことにふさはしい時でない。いずれは一〇パーセントに完全な全集を発行する値打ちがあるにしても、当面は先ず必要の最少限を実現させていただくことにした。それでもなお、

戦後著作集の根幹を成しております。今回の名作選と結合してお読み下されば、たんに、タカラ・テル氏の労作への研究を深めるだけでなく、現在における文化運動の基本コースを正しくつかみとるのに役立つでしょう。以上の他、現在なお入手可能なものとしては、

- 6 愛と死について 中央書局から出版された同名の小冊本と晴明社からでた「うたえわかも」とあわせて手を加え新たに発行したものの。素会双書として青年に親しまれている。(素会 一五〇円 送料25円)
 - 7 青銅時代 (中央公論社) 研究
 - 8 小説大原幽学及び大原幽学伝 (美知書林)
 - 9 ミソ・クソその他 (美知書林) すいひつ
 - 10 エンマ大王 (文化評論社) えんげき
 - 11 ニッポンの農業 (黄土社) 研究
 - 12 我等いかに生くべきか (八雲書店) 思想
 - 13 ハコネ用水の話 (潮流社、現在は理論社にて発売)
- 等、じつに多いのですが、出版社がつぶれたり、その他の理由で、いずれも、現在入手しがたい有様になっています。しかし、これらの大部分は、このたびの名作選の中に収録されることになっているので、読者はそれに據ることができます。なお戦後書かれたもので、これまで何れの本にも収められなかつたもの(例えば「思いでの人びと」など)はつとめて、この名作選に入れることにしました。
- 名作選とは別に、「ロシア童話集」が近く理論社から発行されることになっています。

別項にかかげたように、六冊は発行しなければならぬと考えている。

六冊を編むのには、次のような方針によった。戦後発行されたもので、現在も発行出版社が健在しており、従って入手容易なものは、それによっていただくこととしてはよい。その上で、こんにちの革命的な作家としての作者の自己形成の歩みを知るのに不可欠のものを選んだ。この結果、ごく初期の作品と、大部分の戯曲とが、なお依然として、読者にとって容易に入手しがたいものとしてのこののである。編者としては、これらのものも、きわめて貴重な珠玉だと考えているので、改めて、才二期の計画として実現したいものだと考えている。しかし、とりあえずは、これらについてもこの「しおり」などを通じて、凡その紹介と評価を果してゆきたいと考えてもいる。

わが国の革命的文学陣営も、すでに、その生涯的な回響を加えることによって、より大きな歩みのための深い土台となりうるような作家を、すでに幾人かもちうるようになってきた。その中でも、とりわけ、タカラ・テルは、意識深い作家である。なぜならば、彼は、現代作家の中で、もっともすぐれた能力をもつて、多くの民族的な遺産を、消化し休得してきた。それと同時にまた、もっとも根本的に、それらの遺産をくつがえし、克服する道を歩んでいる。この巾と深さは、今、大きく民族的な創造力をあらわそうとする人々を、はげますすにはない。

詳しくは、各巻の解説が果すだろう。解説は、全巻を通じて神山彰一が受けもつことになっている。(K)

ある日、わたしは、タカラさんに訊ねたことがある。

『先生の言葉は、何ですか？』——まことに礼を失した質問かも知れないけれど、政治家・言語学者・農学者等々、まことに多彩な啓蒙活動の広さと深さにおどろきを覚えていたわたくしとしては、ごく自然な疑問であった。

『小説家です。わたしは。』言下に、まことに明瞭な答えであった。

タカラさんは、小説家であることをいつも誇っていた。だから、小説に対して、いつもすべての理想を賭けていた。書きたいこと、書かねばならないことを、タカラさんほどたくさんかかえている人を、わたしは知らない。そして、それを語るときのタカラさんは、ほんとうに、天心らんまんといつてもいいほど、たのし気だった。このようにふくらんだ理想をかかえて、「作品に集中するために、自分の人生コースの上で、それらの材料を整理し、現在の仕事を系統的に位置づけること」が、どうしても必要だった。

『高瀬川』を語っているときには、もう、『百姓のうた』『狼』が、お互いに関連性をもった構想をとっていた。戦後『ハコネ用水』を書くときにも、すでに『乞食山陽』『石川五右衛門』が関連をもった構想されていたし、『ふたの歌』のような農村を描く農民を描いた短篇でも、その前に『夫婦げんか』で農村の挫折をえがき、そのあと『蛙』で、農村に根をもつ両棲動物的な労働者を描き、さいごに京浜の近代労働者を描いて、「連の『まーきいてくれ』という物語を書くことになていた。——そして、このさい、あとのテーマが、現在のテーマの底をいつもささえて、それによって、作品内容を高めていた。『高瀬川』が「亡びゆくひとびと」として書かれたのも、その後に、農民や労働者をえがく二作がひかえていたからである。

鵜外にたいする私観も、タカラさんの小説家としての誇りと、密接な関係があるようだ。鵜外をひとつの源流として、そこからヨーロッパ近代精神と日本社会との矛盾の方向に一本の線を引くところに、芥川がおり、有島がおり、そして太宰治や石川淳のような現代作家をおくことは、欠くことのできない文学史のひとつで、わたしは考えている。しかし、それと並んで、日立たないけれども、それに劣らず重要なもう一本の線上に、詩人北原白秋の初期における民衆的な詩形の努力をおいたり、タカラさんのような民衆的な作家を位置づけることを、わたしは、大切なテーマだと思っている。感傷的でない方をすれば、鵜外の透徹したヨーロッパ的精神（あるいは教養）の前で、日本の現実、日本人の思考、日本人の詩とことばなどは、何としても鵜外的な自己表現をとりえない泥くささに、身もだえせざるを得なかつたろう。非情と諦念をもつてこの現実を文学的に超克する鵜外的な自我に據らぬ限り、どうにもならぬ停滞のやりきれなさにとりつかれざるを得ない。

石川啄木が鵜外に抱いた一種のインフュエリオリティ・コムプレックスの底には、「それでは、どうにもしようがないんだ！」という叛逆が息づいていたと思う。タカラさんにも、それに通ずるインフュエリオリティ・コムプレックスがあった。啄木が、火の玉のような情熱に自らをやきつくし、白秋が素朴な表現で「民衆のことば」を語りつづける精神的緊張に耐ええなかった中で、ひとり、タカラさんは、ねばり強く、鵜外と対決した。教養の中においても、その文学的対抗意識においても、タカラさんは、ずいぶん努力した。いわば、鵜外のゆき方を借りては自己表現できない日本民衆の泥くさい歩み、最初はタカラさんの心に、鵜外的文学への劣等感として宿り、やがて労働者階級の成長に裏づけられて、文学的勝利をかちとる姿をひらいたのである。

『高瀬川』はこういう文学史的観点で、作者における一つの重大轉機をもたらした作品として位置づけて讀むと、格別に意義深いものだ。

『高瀬川』が都新聞にのる動機となったのは、上泉秀信氏が前作『坂』を讀んで心打たれ、自らその書評の筆をとったことにはじま。飛田角一郎氏が使者となって、この企てを実現した。これを起縁にして、続く二作とも同じ紙上を飾ることになったが、のちに作者は、『わたしの作品が載ると、確実に五千部は、読者がふえたそうですよ。』とわらって語っていた。

タカラ・テル名作選 全六巻内容と配本予定

I 高瀬川 (長篇小説)

配本 5月
280円 千25円
亡びゆく人々——と副題されているように、日本有閑階級の没落の姿を、一人の女性の悲劇の中にとらえた名作

II 百姓のうた・狼 (長篇小説)

配本 6月
280円 千25円
この二篇は『高瀬川』と並んで三部作を成す。前者は女工哀史のうちに農民を、後者は襲来資本と労働者を描く。

III 大原幽学 (長篇小説)

配本 9月
千280円 千25円
日本の共同組合の開祖といわれる幽学の生涯をめぐって、あらゆる進歩を圧殺した日本封建制の姿を描きつくす。

IV 日本の封建制 (研究論集)

配本 7月
千280円 千25円
天皇制の成立農村問題をはじめ各分野にわたって封建制の特色を究める。「ハコネ用水の話」「青銅時代」も収録。

V 文学論・隨筆

配本 8月
千280円 千25円
「われらいかに生くべきか」「ミソ・クソ・その他」を中心に、美しくも興味深い隨想。世の中の見方について読者の眼を開く

VI チェホフ戯曲集

配本 6月
千280円 千25円
これまでのほん訳のなかで一番すぐれた訳として定評がある。同時に、この一冊でチェホフの全貌がつかめるすぐれた構成

全巻予約一時払

書店申込の場合 一、五〇〇円
直接注文の場合 一、五〇〇円
他に送料一〇〇円

選集だより

▼中国で、今もとも注目している日本の作家は誰か？ それはタカクラ・テル氏である。戦後、かれが諸雑誌に書いた論文や詩集は、ほとんど中国では翻訳紹介されているといっても過言ではない。中でも、「ぶたの歌」は大変好評を博し、それについての評論も、たくさん出ていた。また、かれが「エンマ大王」の中で作った「隣人と行進曲」は、ときどき北京放送などで、うたわれている。▼ソ同盟でも、タカクラ・テル氏に対する関心は次々に高まっている。英文の「ソヴェト・リテラチュア」一九五二年一月号には、「ハコネ用水」を中心に長い紹介がなされている。また「ノーヴィ・ミール誌」一九五三年二月号には、「ぶたの歌」の全訳が紹介されている。スズキ・ケンジの版画とローマ字とで美しい絵本に作った「ぶたの歌」は、メキシコ、ハンガリー、チエコスロバキヤ、ポーランドなどにも紹介され、意外なほどの好評をうけている。

▼タカクラ・テル氏の本を、日頃の氏の主張に従って出すとすれば、すべて横組そして完全な縦書きかならずかいてなければならぬはずである。しかし、そうすることは明らかに読者の範囲を狭めるのではないかと心配しながら、おそれるおそれる相談したことがある。「高い見とおしにたつて、日本語の進歩の方向を判断して下さい。そうすれば、現在の出版が、そのほんらいの見とおしに對してどのような関係をもっておこなわれたかが分るはずですよ。それをわかって仕事をすすめてくれれば良いのです。それが分つてもらえなければ、わかつてくれるまで、わたしはわたしの主張をまもります。おおよそこの意味のこたえであった。わたしたちは、そのつもりで責任を感じつつ、この仕事を進めている。

▼この「しおり」のオノ二頁に、作者の次作の構想を「乞食山陽」としたのは誤りで、その部面では「馬道西行」が構想されているのである。

次回配本(VI)

チエホフ戯曲集

チエホフのほん訳は、これまでに数多いが、タカクラ氏の戯曲集には次のような特色がある。

オノ一は、チエホフ研究者として、じつにうってついでしてチエホフを究めたタカクラ氏が、自信をもって、チエホフの傑作六篇を選んでのことである。えらばれたのは

街道・熊・結婚申込

三人姉妹・ワニヤ伯父

極の園の六篇である。

タカクラ氏はチエホフには駄作と呼ぶべきものも沢山あると見た上で結局、右の六篇をチエホフのすぐれた面をあらわす戯曲のすべてだといっている。これだけよめば一般のチエホフ鑑賞としては充分だとまでいっている。

オノ二の特色は、演劇家としてのタカクラ氏の長所が生きていて、完全に日本語として成功し、舞台にのせて、もつとも美しいものとなっていることである。おそらく、このほん訳によつて上演されることによつて、チエホフはますます親しみやすいものとなるのではなからうか。

タカクラ・テル名作選 しおり

No. 2
理論社

「狼」について

タカクラ・テル



「狼」わ、一九三二年（シヨウワ七年）八月から、十一月まで「都新聞」（今のトーキョー新聞の前身）にのった。この「狼」のまえの作品で、同じく、「都新聞」にのった「百姓の唄」とともに、養蠶（農業）と製糸（工業）のかけあいお取りあつた長篇ではっきり、共産主義の立場に立った、私の最初の作品だ。

しかし、当時の、やばんきわまる、けんえつの下でわ、とてい、思ひよに書けなかつたし、かつ、ちやうとで打ちきらなければならなかつた。

こんど、まったく新しく書きかえて、やつと、しあがられることになった。

しかし、材料、すじ、人物の組みあわせ、ほとんど、

かえなかつた。この二十年のあいだに、わたしの思想も、書き方も、そとと、大きく、かわり、成長している。それにもかかわらず、どしどし、こころ古い材料に手おつたかといふと、それわ、次のような理由によるものだ。そのうち、わたしわ、主として、「オノハラ・ユウガク」や「ハコネ用水」のような、歴史的な材料による作品が書き、それによつて、ほんとの大衆のための文学に、新しい面を開こうと努力した。これから、現代の材料による方面でも、新しい方向を打ちたてるために、できるだけ努力おしよと思ふ。それにわ、やはり、この「狼」おしあける所から出発したほいとお考えた。

この作品の材料となつてゐる、一九二九年（シヨウワ四年）の世相お、生き生きと、具体的にえがきだすことができた。今のニッポン民族の進むべき道が明らかに照らしがされるにちがいないと信じた。

おわりに、この作品でも、わたしのほかの文章と同じく新しいカナズカイが使つてある。かつて、古典的なカナズカイの時代に、わたしわ、新しいカナズカイや漢字制限をやつて、いろいろ、苦労をした。今わ、わたしの方針が、いっばんに用いられてゐる。しかし、わたしはわ、ここで止まつておられない。なぜかといふと、カナズカイお改めることも、漢字を制限することも、けつして、それ自身が目的でわなく、すべて、ローマ字へ行く道にほかならないからだ。漢字とカナがニッポンの社会から消え、ローマ字がニッポンの文字となる日がこなければ、ほんとのいみの、文学の大衆化も、文化の解放も、ぜつたいにありえない。ほんとの民族お愛し、民族の文化お作りあげよとする、すべての文化人わ、この問題お、しんけんし考へそのために、たゆまず、おこたらず努力しなければならぬ。

戦後の民主化運動で有名になった塩尻村は、誰いりもなく、タカラさんが指導したということになっている。それはある意味で真実ではあるが、よくあるように、戦後にわがやりの政治指導を機械的にもちこんで、わりにはひとつ方向づけをおこなうような「指導」とは、およそちがったものであった。ひらたくいえば、もったもった、もとのかかった仕事である。

あるとき、タカラさんの住む別荘温泉で、近在の人々を中心とした「自由大学の青年会」というのをひらいたことがある。たいていは五十才をすぎた人たちが、中には、七十才をこえた人もいた。現村長さんも前村長さんもいた。農業会の役員もいた。会社の重役さんもいた。みんなそれぞれに、某しかのそつとうな社会的な地位をもっているばかりでなく、かけがえのない信頼をうけた存在となつてゐる人たちがばかりであった。日やけと禿頭としわが、それぞれに生活の味がききうけ、よほどの名工の手にかかった彫りもののようには、ゆるぎのない厚味を示していた。決して、はげしく語らないが、どのひと言にも、ゆつたりとした生活と体験の自信がうらやけられてゐる。決して、大声でがたがた笑つたりしないが、いつもかわりなくほほえんでゐた。それでいて、乏しい酒肴であるにもかかわらず、話せば話すほどに、ますます話が豊かになつて、いつつきるともない熱気が生れてくるのだった。

この人たちが、三十年まえ、自由大学をはじめたのである。この人たちが、その若々しい理想をよせあつめて、この山深い里に文化の花をうえつけたのである。そしてこの人たちの中には、今もかわりなく、そういふ青年の心が呼吸している。この、すでに青年となつた子供たちを育てあげ、おおかたは孫まである人たちが話すことといえば、この辺の土地が、どんなりっぱな土地になりうるものか、そのためには、なにをしたら良いのか……、そんなことばかりなのだ。どこにこんな美しき土地がある。もしかすると、日本の中にわずかに成立したブルジョア民主主義の文化のにおいが、こんなところに、こんな形で、ほんのすこしの「市民」をつくりあげたのではなからうか。

百姓をしながら、カントやヘーゲルをドイツ語で読む前村長さんもいる。この人たちは、必ずしも、あけくればマルクスの本などをひもとくときはないが、その体につめこんだ長いあいだの市民生活のはばと厚味で、たゆまない良識のかけをこつてゐる。その何人かは、こまにちの反共的常識からすれば、おとそ銀つかわしくない共産党員であつたりもする。そして何しろ、いつでもこつこつと仕事をしているのだ。こつこつとした仕事だから、まわりが走っているときには、いつもいつも日和見だのなんだのといつて、叱られてばかりいるが、叱られても調子に變らない。そんな老青年の一人が、先日共産党不振の選挙のとき、ちょうど上京してゐた。「なあに、ちよつと天気が悪いようならもうやすわい。その人は、のんびりというのだが、何のてらいもなく、その日その日の晴曇の底をつらぬいて、季節の移つてゆくことについて、改めて口にするまでもない確信を示していることにおどろいた。

タカラさんの啓蒙は、そういう力をやしなう啓蒙であつて、塩尻村をはじめとするその地方の「民主化」は、そういう人たちの自然な確信ですすめられてゐるものである。

ある日、その村からの帰り道。タカラさんは、正面の烏帽子岳と浅間山を眺める上空をさして、「雲のたたずまい……」というこぼれがあらますね。ほら、あれですよ。」と、いった。七月のさなかに、すでにその一点に、秋の気配を予告する、雲のたたずまいがあつた。タカラさんは、こつこつと雲のすきな人で、作品の中に、何かといえは「雲がとんでゐる」などと、乱発する。だが、空を見つめて歩く、茫洋たる指導力が、かえつて根柢く退却を知らぬ市民を作つてゐることを日本の文学運動なども、ずいぶんかえりみる値うちがあると思ふ。

「百姓のうた」や「狼」は、となく感傷の多いタカラさんの作品の中でも、とりわけ、多くの感傷がにじんでゐるのだが、わたしは、塩尻村のかえり道で見た雲のたたずまいを思いだしては、日本文学のゆたかなみりのためには、上ほどゆたかな糧がまかれねばならないと思うのである。

タカラ・テル名作選
全六巻内容と配本予定

I 萬瀬川 (長篇小説)
既刊 二八〇円 予30円

II 百姓のうた・狼 (長篇小説)
既刊 二八〇円 予30円

III 大原幽学 (長篇小説)
日本共同組合の閉鎖といわれる幽学の生涯をめぐつて、あらゆる進歩を阻害した日本封建制の姿を写す。

IV 日本封建制 (研究稿集)
天皇制の成立農村問題をはじめ各分野にわたつて封建制の特色を究める。「ハコネ用水の話」「青銅時代」も収録。

V 文学論・隨筆
「われらいかに生くべきか」「ミソ・クロ・その他」を中心に、美しくも興味深い随想。世の中の見方について読者の眼を開く。

VI チェホフ戯曲集
これまでのほん数冊のなかで一番すぐれた傑作として定評がある。同時に、この一冊でチェホフの全貌がつかめるすぐれた傑作

全巻予約一時払
書店申込の場合 一、五〇〇円
直接注文の場合 一、五〇〇円
他に送料一〇〇円

理論社刊
タカラ・テルの著作

ハコネ用水 二二〇円
映画新風雲集の原作長篇小説

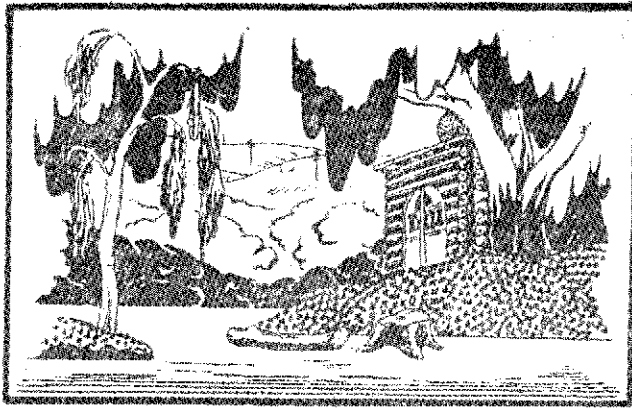
ぶたの歌 一六〇円
国外でも好評の美しい版画小説

新ニッポン語 一七〇円
言葉と民族問題の貴重な文獻

新文学入門 一四〇円
大衆コースの国民文学案内

ニッポンの女 一〇〇円
婦人問題の明快な基本文獻

ハコネ用水の話 一〇〇円
歴史を掘起す苦心の調査研究



理論社

運葉だより

「たとえてみれば、ドストエフスキーは逆善く怒濤のやうなものである。その前に立つと、われわれはその力に打たれて、ふるえあがってしまう。しかし、何だか不安である。チェホフは底の知れない深淵のやうなものである。見たところ、それは非常に静かである。深んでいる。しかし、その底には怒濤を起す力をも感じさせる。」

「人生とは非常に大きな網のやうなものである。ドストエフスキーは、その網のぜんたいを、われわれの目の前で、ふりまわして見せてくれる。チェホフは、その中のごくつまらない一つの目を、ほんのちよいと、つまんで持ちあげて見せてくれる。しかし、その一つの目を見れば、それが網ぜんたいにつながっているということがわかる。」（いずれも『我樂いかに生くべきか』より）

タカラ氏自身が、このような愛情をそそいで研究し、ほん訳した成果を、いまだ新しい姿で皆さんの前にさしたすのは、うれしいことです。先日、ある席で平野義太郎先生におあいしたら、「タカラさんにチェホフのほん訳があるとは、知りませんでしたよ……」とおっしゃっていた。そういう方々がぞんがいに多いので、この巻を出すのは殊にたのしみなのです。（K）

読者通信

▼先生の「高瀬川」大面白く拝見しました。先生のお作は一大原稿と「ハハ」と村水「そのほか二三のエッセイしか読んでおりませんでしたが、先生にこんなお作があることを知り、おとろき思、感服いたしました。」「高瀬川」は今から二十年近い以前の色紙が舞台になっており、ほろびゆく人々という傍題がついていますが、感服は今もなおほろびゆくところ相違さかえており、あの小説の中にある暗い封建制は今もなお微く残っており、主人公小三姐さんのような、あらっほいだなかぜが今はなくなつたようですが、矢張り人権をいさうりんするやうな悲しいことが現山あるようです。あらっほいだなかぜがないのは、だんなになり手がなくなつたので、それはホヘンがダメになつた不況から来ております。「高瀬川」における「底の怒濤」の風物、音響効果をおえた劇術、裏におとろき等愛憎、先生がどうしてこの微に入り細にわたつて色紙の風俗習慣をいさへになつたか全くおどろくほかりません。涙ぐましい「庶民の心理描写」ほんとうに感心いたしました。感嘆を近代的な見方で覆いたものに成島柳北の「東鑑一葉」がございしますが、じつにあれ以来の歴史的な作品と存じます。（吉村公三郎）

▼「高瀬川」最後の解説で、三三八頁から三三九頁にかけてのそれは、私にも深い反省を与えます。「とくに、日本の文化運動にひそむダブル性を指摘するのに容赦なかったタカラは、それゆゑに、小市民的インテリゲンチヤの一部からきつい反撥をうけざるを得なかつた……」かつて小田切秀雄氏の「共産主義的人間」という論文の中でその「反撥」を行つたことを今はっきりと思い出します。あれから二年あまり、状況はますますすけわしく、小田切氏も私も、小市民インテリゲンチヤの観念性からぬけたそうとつとめ、以前よりずっと深く日本の革命的な文化運動について、じかに感じるようになりました。（高橋 徹）

タカラ・テル名作選
全六巻内容と配本予定

I 高瀬川（長篇小説）

既刊 二八〇円 予価 30円

II 百姓のうた・狼（長篇小説）

既刊 二八〇円 予価 30円

III 大原 幽 学（長篇小説）

9月下旬配本 予価二八〇円

IV 日本の封建制（研究論稿）

9月上旬配本 予価三〇〇円

V 文学論・人生論

8月中旬配本 予価三〇〇円

VI チェホフ戯曲集

配本中 二八〇円 予価 30円

全巻予約一時払

書店申込の場合 一、五〇〇円
直接注文の場合 一、五〇〇円
他に 1100円

タカラ・テル名作選 しおり

No. 4 理論社

ソ連盟のもっとも大衆的な雑誌として著名な
"アガニョーク" (プラウダ発行) はタカラの
"ぶたの歌"を別冊附録として発行した。

БИБЛИОТЕКА

ОГОНЁК

№ 23

1953



Такакура ТЭРУ

ПЕСЕНКА СВИНЬИ

ИЗДАТЕЛЬСТВО
«ПРАВДА»
МОСКВА

編集だより

▲ソヴェトの「プラウダ」が編集発行している世界的な大衆雑誌「アガニョーク」は、一九五三年二三号に、わざわざ別冊附録として、タカラさんの「ぶたの歌」を発行しています。これは日本作家の作品が海外に紹介されたあらゆる歴史の中で、もっとも大規模なものであり、もっとも大衆的なものです。この作品は、すでに中国でもきわめて高く評価されていますが、こんど、ほとんど全ソヴェトのすみずみまで愛読されることになったわけです。この別冊には、わざわざシーモノフが、長い感想文をよせています。(それは近く別にはんやく紹介する予定です。)

▲「ぶたの歌」が、このような国際舞台で陽の目をみたことは、出版社としては、色々の意味で、うれしいことです。わたしたちは、この作品のもつ深い意義をみとめ、この本のためにスズキ・ケンジの色刷り版画をつくつてもらい、これに著者ねんらいの主張であるローマ字の説明をつけ、その他に本文全部と、版画のつくり方を入れて、民衆的な文学のあり方を、その可能性において美しい本にしてみました。ところが、このような簡潔な文字は、ほとんどまっとうな批評をうけないでおわり、出版としても、きわめて不成熟な結果でした。しかし、わたしたちが感じた意義は、かえって国際的に評価され、こうして、わたしたちの手もとにはねかえってきました。この機会に、民衆的な文字のあり方、ローマ字の可能性、版画運動の意義などについて、日本でも改めて深い関心の生れることを祈ります。中国の趙樹理などの短篇をはめるだけでなく、日本の作品も積極的に問題にして下さい。

次回配本(九月)

日本の封建制

新しい世界観

天皇制と皇室の問題・愛と死について・一つの世界——等戦後、封建制ののりかすを克服するために書かれた労作

戦時時代その他

戦時下に日本の悲劇の本質をみぬいた抵抗の時代批判

ことばの問題

日本の封建制を克服する文化上の中心的課題

日本の農業

農民愛につらぬかれた分析

ミソ・クソ・その他

あらゆる社会事象の中に封建制を見ぬく眼を培う随想

日本の封建制について、たんなる分析だけでなく、その生活の体臭までも生き生きとつたえる本だ。

こんど選集の第五巻を「文学論・人生論」と名づけて配本することになったが、おそらく、このような固くするらしい題名を、タカラさんは好まないだろうと思う。三木清の思い出を講いたくしたり、警視庁を逃げだしたタカラさんが、その足で三木氏の宅にゆき、おそく帰ってきた三木氏の顔を見るなり、暮ばんに向って「いちばん、やろうか」というところがある。おどろくというよりは、呆れた感じで、わたしは読んだ。また、あるとき、わたしはタカラさんと場末の食堂でめしを食ったことがあるが、ふと、箸をとめてタカラさんがつぶやいた。「国鉄はどうしたかなあ」——わたしは、そのころ沼津の方でひらかれていた国鉄の中央委員会のことかと思つて、「今度は、民間にくわれでしようね」などと答えた。すると、タカラさんの方がかえってびっくりした顔をして「え？」と反問し、やがて、にやにや笑いながら、「君たちの頭は、ストライキマンの頭だから、いつでも、ひとつのことばかり思いつめているんだ。」と、語った。そのとき、タカラさんは、国鉄スワロウズと読売ジャイアンツの野球試合のことを考えていたのだ。そのころ負けてばかりいる国鉄が、金田の好投で、いちばん強い巨人軍をつずけて食っている。それが、大衆の興味をひいているときであった。「金田つてやつは、おもしろいな」と語るタカラさんを、そのときも、呆れて眺めたことである。そんなタカラさんを、いちばんよく表徴しているのは、風呂へいったときのことだ。敗戦直後の東京の銭湯は、フロシキで着物をくるんだり、下駄を紙につんだり、傘は流し場までもって入るというふうなありさま、わたしなどは、なるべくいきたくない気持になるほどの汚なさで混雑であった。ところがタカラさんはどんなときでも、きわめて気軽に「風呂へ行きましよう」といって、さっさと先に立ってゆく。そして、着物もなにもぬぎすてたまま、さぶんと湯舟につかっで、しかも、その中で、さぶさぶと顔までつける始末であった。また、夏など、国鉄の駅前広場などで、つまらぬレコード音楽で猛おどりなどがあると、必ず立ちどまり、家についてその音がきこえると出かけていって、いつまでも眺めつづけているのだ。——見きにつけ照しきにつけ、「民衆」は、タカラさんの頭の中にあるのでなく、体の中に住んでいた。その後、わたしは東京の文化人たちにふれる機会を多くもつようになってから、タカラさんのこういうセンスは、ちよつと類例のないものであることを思い知らされた。大部分の文化人にとって、日本の民衆は「衆愚」であり、同情すべきものであり、救いを垂れるべきものであるらしい。たとえ、考上方の上では民衆的であっても、生活上のセンスの点では、文化人は「異邦人」である場合が多い。

こんな半面に、また、こういう例もある。ある日街をあるきながら、しきりに、あちこちを気にしている。「どうしたんです？」ときくと、「タレスが今日はおくるんですよ。タレス帰れ！」のビラが、一枚位はあつても良いんだがなあ——」と、いうのである。それは、ある年の瀬であつたと思うが、タカラさんは、タレスの計画を見ぬいて、朝鮮戦争の危険を予言した。日本の労働階級が、タレス帰れ！と叫ぶ政治的成長をけない限り、この戦争をふせぐことはできない。それを心配するタカラさんだつた。そして、不幸にも、その予言のとおり、翌年の初夏、血なまぐさい戦争を、世界はむかえた。

この選集のエッセイは、タカラさんの、民衆の中で風呂につかっているような説得力と、するどい判断力とを、あわせ示している。いま、日本の青年たちは、大きく学習運動に参加している。この学習の中に、わたしは、タカラさんの数々のエッセイの持つ、大衆的な説得力を、ぜひ加えてほしいと考えている。一九四八年と九年の両年にわたって、信州の別所温泉で、地もとの共産党が主催して、学校がひらかれたことがある。ある禅寺に泊って、起居いささいをともにする修道僧たちのような共同生活だつた。そのときタカラさんは主要な教師の役割をつとめたけれど、いわゆる戦略戦術とか、経済学とか、哲学とかいう部門をわけた講座の形式をいっさいやめて、「いかに生きべきか」ということを中心にした問答式の教室を実現した。根本的な考え方をきちんとしておけば、人間は、どんな嵐の中でも確信をもって斗える——というのがその主張であつた。そのとき、この学習に加わった青年たちは、今も、もっともゆるぎない位置で、村に、工場に、明るく斗っている。

タカラ・テル名作選
全六巻内容と配本予定

I 高 瀬 川 (長篇小説)
既刊 二八〇円 送三〇円

II 百姓のうた・狼 (長篇小説)
既刊 二八〇円 送三〇円

III 大原 幽 学 (長篇小説)
10月配本 予価二八〇円

IV 日本の封建制 (研究論集)
9月配本 予価三〇〇円

V 文学論・人生論 (研究論集)
配本中 三〇〇円 送三〇円

VI チェホフ戯曲集 (ほんやく)
既刊 二八〇円 送三〇円

全巻予約一時拂

書店申込の場合 一、五〇〇円
直接注文の場合 一、五〇〇円
他に送料百円

理論社刊
タカラ・テル著作集

新 文 学 入 門 予一八〇円
送二〇〇円

大衆エッセイの国民文学案内として好評の書。新稿を加えた増訂版

新 ニ ッ ボ ン 語 一七〇円
送二〇〇円

国語問題と民族問題の根本の関係を解き明す基本的な文獻。重版出来

ぶ た の 歌 一六〇円
送二五〇円

別項のとおり国際的評価をうけた美しい版面とローマ字の読本。限定版

ハ コ ネ 用 水 二〇〇円
送二五〇円

映画「新根風雲録」の原作長篇小説

ニ ッ ボ ンの 女 一〇〇円
送一五〇円

明快な婦人問題の基本文獻

ハ コ ネ 用 水 の 話 一〇〇円
送一五〇円

歴史を掘起す苦心の調査研究

読者より

▲名作選を読んで、ますますタカクラ・テル氏への信頼感がまして来ました。ことに、「文学論・人生論」でのタカクラ氏の態度には、共感をおぼえます。一夜にして読ませてしまう魅力は、なかなかもてないものと思われまします。「ふたの歌」が陽の目を見たのは同慶のいたりです。(徳島県川俣町・本多晃) ▲時代は、二十五年前のことですが、今の世の中と比較して、ただ前よりも少しは自由平等の世の中になって来たが、ダン庄はやはりある。世界の状態は変わっても、精神の変わっていないことが、つくづく、痛感された。「百姓のうた」の手紙形式の文章ですが、姉からの返事の手紙の方も書いていただけたら、いっそう良かったと考えます。名もなき高校生の意見ですが、先生にきいて下さい。(長野県上田市・児玉公一) ▲何か、みんなのためになる仕事に精出すことが、もっとも生甲斐のあることだと思ふ。希望を失わないことが、今の世には、最も大切なことだと思ふ。「俺にも何かできる」——そういう人間が歴史をつくってゆくのだ。人間は仕事の中で育ってゆく。タカクラ氏の本は、そういうことを教え、私たちに、「よし、おれも何かやるう」という気持を、おこさせる。……みんなが、希望をもって、日本のことを、そして世界のことを語り、それを実践するような日が、一日も早く来たら、それだけ、私たちのくらしはよくなると思ふ。(北海道小樽市・黒川隆)

★編集部より★ 予定の配本計画より少しずつおくれましたが、あと一卷「大原幽学」で、この選集も、いよいよ終ることになりました。読者の中からはその他の初期の作品などについても、ぜひ、読めるようにしてほしいという希望も寄せられております。げんざい出版社としては、いわゆる蒸しかしという「金集合戦」の被害をうけ、まじめな本が世の中へ出にくいような条件の中で、頑張って仕事をすすめております。読者のあたたかい支援を、心からお願致します。なお、既刊のタカクラ・テル著作集をも、大いにおよみ下さるよう、皆さんにおすすみ下さい。

タカクラ・テル著 新文学入門

増補改訂新版

「日本の封建制」とならんで、ぜひおすすしたい本は、「ニッポンの女」(一〇〇円)「新ニッポン語」(二〇〇円)そして、「新文学入門」です。これらの本は、いずれも日本の封建制を理解する上で、欠くことのできない重要文獻であり、何よりも、誰がよんでもおもしろいものです。すでに、いずれも数版を重ねておりますが、このうち「新文学入門」は、こんど、その後に書かれた新論文二篇を増補し、新しい姿で、世にあらわれることになりました。最近問題となっている「国民文学論」などについても、本書を出発点としないうちに、やたらに、横道へそれてしまふ結果となりましよう。文学の研究書というよりは、広汎な大衆の思想案内上の基本文獻としておすすします。(十月上旬刊 二〇〇円)

タカクラ・テル名作選

し お り



No. 5
理論社

「日本の封建制」について

神山 彰一

日本の革命の課題と目標を正しくつかむために、私たちの学習は、日本の封建制を見ぬことに、大きな精力をさかねばならなくなっている。だが、悲しいことに、私たちの学問は、永いあいだ、概念的で、ハンチュウ規定的で、公式的な偏向をもっていた。制度や習慣の上に、はつきりと烙印をおしている「封建制」について、それを指摘することは、誰でもできるようになった。また、経済学的な概

念としての「封建制」や、政治学的概念としての「封建制」については、誰しも、理解するようになった。しかし、私たち自身の生活のすみずみまでしみわたって、知らず知らずの間にも、私たちの生活意識をしばりつけている「封建制」を、とくに、自分のちからで自覚にのぼせることは、なかなかむずかしい。とくに、それを知ることが、同時に、それをにくみ、それとたたかうことになる——という、主体的で行動的な理解は、はるかに立ちおくれしている。ましてや、大衆のところにやさしく金い入って、その大衆の日常的な気持の中で、気長く、「封建制」をきりくずし、意識を改造してゆくことのできるような知恵は、なかなか、とほしい。その結果、家庭では天皇制を尊厳する「革命家」や、大衆を専政的にひきまわす「指導者」などが、ぞくぞく出る実状だ。こういう中で、タカクラさんのこの本は、私たちに、自分の力で「封建制」を見ぬき、どんな片すみでも、ねばり強く闘うことのできるような、生活的な知恵を与える。どんな「学問的研究」よりも、生き生きとした学問だと思ふ。このごろのいわゆる「大衆コース」論の根本には、こういうものの見方がすえられべきではなからうか。

「青銅時代」のころ

タカラ・テル

私は、一九三三（昭和八）年二月、農村における共産主義運動のため検挙されその年の九月、ナガノ刑務所未決監に送られた。同時に以後ナガノ県に住んではならんというので、まず、私の家族がトウキョウへ追われた。そこで、次の年の七月の末、保釈になると同時に、私もトウキョウへ移らざるをえなかった。

もともと、ナガノ県の農村に骨をうづめるつもりで、一九二二（大正一一）年から、住んでいたのだから、これはずいぶんつらいことだった。これらの労働者や農民と別かれて、まるで水を失ったフナのような気持で、とほうにくれた。

しかし、もともと、私は著述家だ。そこで、新しく著述に全力をささげる方針をたてた。そして、一九三七（昭和一二）年から、あらゆる困難とたたかいながら書いたものを発表した。それらは主として雑誌「中央公論」「思想」「教育」にのった。これらの論文の主なものを集めたものが、「青銅時代」だ。

これらの論文を書き始めた一九三七（昭和一二）年から、「太平洋戦争」の終るまえの年の一九四四（昭和一九）年まで、とにかく、私は著述家の生活をつづけた。しかし、そのあいだ、戦争のすすむにつれて、軍国主義政府の共産主義者にたいするあつぱくは、加速度ではげしくなり、やばんの限りをつくした。私の論文は一度も発売禁止になったことはなかったけれど、これらの論文のゆえに、一九三九（昭和一四）年・一九四二（昭和一七）年・一九四四（昭和一九）年と三回の検挙をうけなければならなかった。そのたびごとに、これらの論文が起訴される理由となり、獄中生活の原因となった。

これらの文章を書くために、私はとくべつの苦勞をした。共産主義思想をいかに合法化し、いかにけんえつの日をまぬがれるかということのために、もとより、ひじょうな苦心がいった。たとえ、ば、「青銅時代」で、二重橋の楠公の銅像には、明かにレニングラードのビョートル大帝像をまねた要素があるけれども、当時は、それを書くことができないので、楠公像の写真とビョートル大帝の写真ならべておくよりほかに仕方がなかったというようなのが、それだ。

だが、それ以外に、これらをどういう文体で書くかということのために、もっと大きな苦勞をした。私は、長いあいだ労働者や農民のあいだに住んで、左翼の思想家をふくめた、これまでのインテリというものの書く文章が、いかに大衆に理解しにくいものであるかを、身をもって知った。そして、なぜそういう現象が生れたかという理由について、深く考えなければならなかった。大衆の解放のために、大衆に正しい意識を持たせるためには、私たちの思想が大衆の底までしみ通らなければならぬ。そのために、新しい文体を作らなければならない。必要だった。それまでの私の文章そのものが、そういう目的のためには、まったく役に立たなかった。ニッポンのいつさの文章が、いさよに生活して、私自身がいかに封建制の泥沼からぬききれずにいるかということを、痛いように知った。ニッポンのことばも、文字も、大衆の生活の向上のために、大衆の立場から、根本的に作りかえなければならぬ。

もとより、根本の方針としては、ことばは、むずかしいインテリのものやめて、大衆が生産点で使っていることばを整理して、これにおきかえ、文字は、これまでの漢字カナまじり文をローマ字におきかえ、というところでなくてはならない。しかし、その方針をじっさいに行なうためには、いさよのない困難がある。それは、たんに自覚の問題だけでなく、封建的な専制主義の政治的あつぱくとかく結びついている。そこで、共産主義運動の重要な一翼として、国語国字運動が取りあげられなければならない。……（中略）……だが、このために一九三九（昭和一四）年、封建制のきその上に立つ天皇制に反抗したという理由で、検挙を受け、獄中生活を送らなければならなかった。

今度、いよいよ私の「カナずかい」が標準的なものとなり、「勅語」までがこれで書かれるようになった。ニッポンの封建制が音を立ててくずれ落ちるのを、私は自分のからだで聞くような感じがする。……（中略）……「青銅時代」でいっているように、ニッポンの社会は、太平洋戦争の始まるまえから、たしかに、質的な変化の姿を現わしていた。帝国主義から社会主義への本質的な発展、もとより、それは、ニッポンだけでなく、人類ぜんたいの進みつつある大方針であるというところに、根本の問題がある。いま、すべての人類が、まさしく、新しい「青銅時代」のまんなかにいる。これを自覚しない者は、けっきょく、この光栄ある時代から取りのこされなければならない。……

（中央公論社「青銅時代」の序文より一九四六・二月）

タカラ・テル名作選 全六巻内容ご配本予定

I 高瀬川（長篇小説）

既刊 二八〇円 送三〇円

II 百姓のうた・狼（長篇小説）

既刊 二八〇円 送三〇円

IV 日本の封建制（研究論集）

配本中 三〇〇円 送三〇円

V 文学論・人生論（研究論集）

既刊 三〇〇円 送三〇円

VI チェホフ戯曲集（ほんやく）

既刊 二八〇円 送三〇円

III 大原幽学（長篇小説）

10月配本 予価二八〇円

日本の共同組合の開祖といわれる幽学の生涯をめぐって、あらゆる進歩を圧殺した日本封建制の姿を描きつづる長篇。著者年譜入。

金巻予約一時払

一、五〇〇円 他に送料百円

理論社刊

タカラ・テル著作集

新文学入門 門 送二〇〇円

大衆コースの国民文学案内として好評の書。新稿を加えた増訂版。

新ニッポン語 送一七〇円

国語問題と民族問題の根本の關係を解き明す基本的文獻。重版出来

ぶたの歌 送一六〇円

国際的な評価をうけている美しい版画とローマ字の新説本。限定版

ハユネ用水 送二〇〇円

映画「箱根風雲録」の原作長篇小説

ニッポンの女 送一〇〇円

やさしく明快な婦人問題の入門書

ハユネ用水の話 送一〇〇円

歴史を掘起す苦心の調査研究史料

タカラ・テル名作選
しおり



No. 6
理論社

名作選全六巻の完結にあたって

予定よりすこしずつおくれましたが、それでも、読者のみなさんからのあたたかい支持のもとに、タカラ・テル名作選を完結することになりました。この間、読者からはじつにたくさんのお返事が寄せられ、わたくしたちは、心からはげましをうけたものです。

ちょうど、国民文学論が、文学界の中心的課題になっていた時期でしたから、そのために、ひとつの大切な素材としてむかえられた面もあります。しかし、何と云っても、こんにちの各階層の人びとにたいし、いまもなお心にふれる「自分たちのための作品」としての感銘をあたえた面が強かったと思います。芸術至上主義のとりことなっているひとにぎりの「専門的な」読者たちは、ともすれば、「大衆小説であるかどうか」というようなことを、その小説について語りました。また「あまりに明快に割りきりすぎる」というような批判も、そのエッセイによせられました。にもかかわらず、「ほんとうに面白かった」「主人公とともに泣いたりおこったりした」「何故もったとはよく読まなかつたかと悔まれる」というような声が、大部分の読者の声でした。このような素直な感動が、いま、ソヴェトや中国へもこの作者の作品をひろめたことにつながっているわけですが、読者を知らぬ大衆の前進の中で、作者の名は、もっと愛され、もっと広まり、歪みのない大衆的評価をうけることでありましよう。

ろにある。それを語るのに、面映さを感じたり、それを語ること、公式主義におちいったり、それを語るまえに、「抵抗」に沈滞したり……そういうことで馴れあっているインテリゲンチヤたちの日本の現状の中で、そういうものなかなかくりすてたタカラさんこそ、ユニークな存在なのである。こういうタカラさんであるからこそ、その独断も、その弱点もふくめて、大衆の中で、おほかたな支持をうける。くる年も、くる年も、「革命らしいねん説」をききながら、大衆は、自ら種をまき、耕し、刈り、そして斗うのである。

わたしたちは、タカラさんを「偉大な作家」などと、おしつけがましく評価する立場はとらなかった。日本文学における「文学と民衆」のもんだいについて、「国民文学」のもんだいについて、今日の考えをすすめる上で、タカラさんの業績は、多くの意義を示している——その意義を検討し、とくに、今日の課題をすすめる方向にそって役立ててもらえば良いのである。わたしは、ほんとうの批評精神というのは、たんに、「偉大か否か」をきめたり、「純文学的か大衆文学的か」というような芸術至上主義的な価値判断をふるうことにあるのだとは思わない。たとえば、エルミイロフの「チェホフ研究」があらわしているように、ゆたかな歴史の流れの中で、その作家を全体として評価し、評価するばかりでなく、生々とその役割を再現して見せ、そして結果としては今日の歴史的課題を、その国の文学と文学運動のもんだいとして明かにする。こういう本すじの「批評」と「批評精神」が底におかれた上で、数々の印象批評などが、はじめて意義をもってくる。狭い文壇の中で、印象批評のコツのようなものだけをこころえて、それを適当に処方していれば「批評家」として流通するのが、日本文学界の現状であるが、この選集が、そういう優柔な「批評精神」をはるかにこえた、大衆的な論議の中で、大いに批判されつくすことを、心からねがわずにはいられない。

理論社刊

タカラ・テル著作集

ハコネ用水 二五〇円

進歩的文学の傑作として国際的な評価をうけた長篇。別巻新装発売
ぶたの歌 一六〇円

小さな短篇が語る大きな真実。美しい版画とローマ字の読本限定版
新文学入門 二〇〇円

大衆コースの国民文学案内として好評の書新篇を加えた増訂版発売
新ニッポン語 一七〇円

国語問題と民族問題の根本の関係を解き明す基本的な文献重版出来
ニッポンの女 一〇〇円

明るく楽しい婦人問題の基本文献
ハコネ用水の話 一〇〇円

歴史を掘起す苦心の調査研究記録

「タカラさんの革命いねん説」ということばがある。信州の農民たちはそれに、明るい愛着をおぼえている。論旨をわめて明快、世界の状況から驚きおこし脱ぎだつて、ついに、「らいねんの今ごろ」は、何としても世の中がひっくりかえらざるをえなくなる。語りおわつて会衆一同が思わずもうなるほど、さわやかな演説だった。だから選挙のときなど、一つの会場から次の会場へと、同じ話をくりかえして行くためについでついでに老人などもあったほどだ。そんな老人たちは、時にはふところの生卵などをしのばせていて、語り終えたタカラさんにささげたりする。そして、それをうまそうにのみほすタカラさんを眺めながら、自分自身が、しあわせそうな顔をする。こういう現場にいあわせてみると、きわめておもしろい風景で、タカラさんにしては、かくべつ「大衆をアツク」というような、陰性なかげは、みじんももっていない。じつさに、タカラさんは、およそ一年ぐらゐを単位に世界の諸情勢に、ある判断をくだす努力をしていた。それは、ちやうど、農民たちが、冬の間に一年の作付を思いめぐらし、「今年はこれでいこう」と決意したうえで、種をまき、たがやして彷彿く——その姿に似ていた。こんな点でもタカラさんのやり方は、ひどく農民的であった。

ところが、インテリゲンチヤにとっては、「革命いねん説」では困るのである。そういうかげのない考え方は、「深み」がなく、内燃する抵抗感情のさまたまのかげをおしつぎし、従つて、「ほんとうの苦しみ」の救いにはならぬ——というのである。およそタカラさんほど、インテリゲンチヤを説得することが、へたくそな人にあるまい。それでいて、当の本人は、自分はこの説得力をそなえているものはないだろうと、自信をもっていた。こういうところから、思はずも微善統を築きえないような、日本文化人のひとつの力加チエチが生れたりする。この運路の途中でも、丸山静江とか、田井吉見さんのような「代表的日本型インテリゲンチヤ」が、陰に陽に、こういうタカラさんの態度に、多くの反撥を示された。とくに、そのひとり、東京新聞あたりの、うす汚い匿名評らんや、現代型のたいこもち談話「たのしき毒舌」(改造)あたりまで、こんな尾ひれを引きずりまわすほどに、教養的な反撥を示しつづけた。こういうありさまを見ていると、インテリゲンチヤの諷刺に失格を示しているタカラさんの姿が、かえつて、すがすがしく浮いてくる。

たしかに、タカラさんは、独断が多く、かげをきりすてて、自説を展開する人であった。しかし、タカラさんの独断には、ある特長があった。それは自分自身が、長いあいだインテリゲンチヤとして苦しみつづけて、自分で自分のかげをきりすてることには半生の努力をささげてきたあげく、やがて、そういうかげのない主張こそが、大衆に対して責任のある主張であると自覚した——そういう自覚のがんばりが、不断に彼の根柢をささえていた。しかし、さすがに、三木清の死や、田中英光の死のようなケースにぶつかること、さしものがんばりも、思はずほころび、人知れず深い悲しみにとらわれるのだった。わたしは、そういう悲しみを、彼とともにしたとき、そこに日本インテリゲンチヤの高い歴史的な苦悩を思い知らされずにはいられなかった。また、タカラさんの独断のもうひとつの特長は、党と大衆への過剰なまでの愛情につらぬかれていたことであつた。彼は、周囲をうかがつたり、ある権威をかさに蔽たりして発言することをケイベツしていた。彼は、党や大衆を自分の衣として、その権威をもつて語ることを、自分にゆるさなかつた。彼は、自分の方から、党を愛し、大衆を愛する発言を、誰にえんりもなく語るにすぎない。自ら、コムニズムについて、あるインフエリオリテイ・コムプレックスをもっている一部のインテリゲンチヤは、こういうタカラさんを、道に理解する。タカラさんがあたかも、党や大衆を愛にきて独断をふりまわすかのように計算し、きわめて八方やぶれのおおらかなタカラさんのあけ足とるをするので、党と大衆を批判しようとする。そういう自主性のない立場からすれば、およそタカラさんほど、批判のまな板にのせ易い人はいないわけだ。しかしタカラさんの本領は、「党の見解を代表」するかどうか、というところにあるのではなく「党と大衆への信頼と愛情」を、誰はばかるところなく、たえず広言するところ

タカラ・テル名作選
全六巻ついに完結ノ
千巻30円

I 高瀬川 (長篇小説)

亡びゆく人々——と副題
されているように、日本
有閑階級の没落の姿を、
一人の女性の悲劇の中に
とらえた名作

280円

II 百姓のうた・狼 (長篇小説)

この二篇は「高瀬川」と
並んで三部作を成す。前
者は女工哀史のうちに農
民を、後者は制糸資本と
劣化者を描く。

280円

III 大原幽学 (長篇小説)

日本の共同組合の開祖と
いわれる幽学の生涯をめ
くつて、あらゆる進歩を
圧殺した日本封建制の姿
を描きつくす。

300円

IV 日本封建制 (研究論)

天皇制の成立農村問題を
はじめ各分野にわたつて
封建制の特色を究める。
「ミソ・クソその他」青
銅時代」なども収録。

300円

V 文学論・人生論 (随筆集)

「われらいかに生くべき
か」「愛と死について」
を中心に、美しくも興味
深い随想、世の中の見方
について読者の眼を開く

300円

VI チェホフ戯曲集 (ほん紙)

これまでのほん紙のなか
で一番すぐれた訳として
定評がある。同時に、こ
の一番でチェホフの全貌
がつかめるすぐれた構成

280円

全巻一時払

書店中込の場合 一、五〇〇円
直接注文の場合 一、五〇〇円
他に送料一〇〇円